

## 「被投性」か「繁殖性」か —レヴィナスのハイデガー批判はそもそも何を狙っていたのか—

渡名喜 庸哲（慶應義塾大学）

2009年からはじまった『エマニュエル・レヴィナス著作集』の公刊は、これまでのレヴィナス哲学（とりわけ『全体性と無限』にいたる時期までの）の理解に対し、いくつもの修正を迫るように思われる。第二次大戦中に書かれた「捕囚手帳」（第一巻所収）には、自らの「なすべき仕事」が「存在と無」および「時間」の問題であると述べつつ、「現存在から出発するか、Jから出発するか」という選択を自らに迫る若きレヴィナスの姿が認められる。「J」は存在範疇としての「ユダヤ的存在」を指しているが、そのことはともかく、そこに読みとることができるのは、後年の著作から惹起されるような「顔」の「倫理」の立場からの存在論批判ではなく、ハイデガー哲学の根本的な意義を認めつつ、『存在と時間』の思想を、出発点を挿げ替えるかたちで書きなおすというレヴィナス自身の企てであるように思われる。もう一つ特筆すべきは、レヴィナス哲学の代名詞というべき「他者」という発想はこの時期にはまだ現れておらず、その代わりに、『全体性と無限』第四部を彷彿させるようなかたちで「エロス」の問題をめぐる哲学的考察が展開されていることだ。

もし、レヴィナスが温めていたそもそもの哲学的な企図が、ハイデガーとは別の仕方でも「存在」と「時間」の問題にとりくむことであり、なおかつ同時に「エロス」の問題にも並々ならぬ関心を抱いていたのだとすれば、レヴィナスにおけるハイデガー理解（ないし批判）という問題は、（既刊著作と未公刊資料を読み合わせつつ）上のような視角から捉えるべきではないか。これが本報告の基本的な立場である。

なかでも焦点を絞るならば、本報告の主題は、一言で言えば、ハイデガーにおける「被投性」および「死」をレヴィナスがどのように捉えたかにある。もう少し具体的に言うと、「被投性と […] 「死に臨む存在」との統一態において、誕生と死とはすでに現存在的な「連関」を形作っている」（SZ, 374）と述べつつ現存在の「時間性」ないし「歴史性」の問題を提示してゆくハイデガーに対し、レヴィナスがどのように応答するかということである。そもそもこの問題へ応答を試みるこそが捕囚期から『全体性と無限』にいたるレヴィナスの究極的な課題となっていたということが本発表で示したいことではあるのだが、そこにいたるまでの論点を分節化すると次のようになる。

第一に、現存在の具体的、事実的存在様態としての「被投性」という問題は、レヴィナスにとって、三〇年代初頭から、ハイデガー存在論のフランスへの導入に際しても、そこから自身の哲学を練り上げる段階に入っても、きわめて重要な主題となっていた。

第二に、レヴィナスの「被投性」理解の特徴は（『実存から実存者へ』を経て『全体性と無限』にいたるまで）、これを *déréliction* という否定的な価値評価を含む仏語で訳す点にある。これは、単に世界に投げ入れられているだけでなく、「遺棄されている」、（とりわけ神

的存在から)「見捨てられている」という意味を含む訳語であるが、そのような訳語の選択はけっして中立的なものとは言えず、その意義を検討すべきであろう。

第三に、「捕囚手帳」から、同じく『著作集』第一巻所収の「哲学雑記」(主に五〇年代に執筆されたメモ)へと続けて読解してゆくと、「被投性」の問題に対し、「創造」や「父性」が対置されるのが認められる。「私」は「父」なるものによる「選び」により「創造」されている——読者をしばしば面食らわせるこうした比喩的表現も、そもそも事柄としては(いわば「偶然」的「はじまり」とも言いうる)「被投性」という考えと対置されるかたちで考案されていたということは一考に値しよう。こうした举措は、上に引用したようなハイデガーの言う「誕生と死」との連関を、「被投性」ではないしかたで考えようとするレヴィナス自身の試みの一環とみなすことができると思われる。

第四に、こうした試みは、ほかならぬ「エロス」(および「繁殖性」)を主題とする『全体性と無限』第四部にいたって一定の理論化が与えられる。そこにこそ「生」と「死」との「関連」、さらには「死」を超えた「歴史」の問題について、まさしくハイデガーとの格闘のなかで、しかしそれとは別の基盤から論じるというレヴィナスの企ての眼目が示されているだろう。この点を示すことが本発表の最終的な目的である。ちなみに付言すれば、そうだとするとレヴィナスの「繁殖性」という考えを、ハイデガーが「民族」の「歴運」と述べたものとの関連で捉えなおす視もそこから開かれるように思われる。